

西鶴文集

上

昭和五年四月十日 印刷
昭和五年四月十三日 發行

有朋堂文庫
西鶴文集上卷
(非賣品)

編輯者

塚本哲三

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

印刷者兼發行

三浦捷一

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所

有朋堂印刷所

東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製

緒言

西鶴姓は井原、鶴永、西鵬、松壽軒等の別號あり。大坂に住み、俳諧を西山宗因に學び、夙に一家を成して談林派の驍將たり。延寶三年の大坂獨吟集を始として、相次ぎて十數種の俳書を出し、が師翁宗因の歿せし天和二年、即ち彼が四十一歳の時はじめて筆を浮世草子に染め、一代男の處女作に案外の喝采を得しより乗地になりて、矢繼早に二代男、三代男、五人女、一代女等の好色物を出し、それより武家物、町人物等に移り、以上十餘部の草子を綴り、色酒の浮世の月見過して、元祿六年八月十日、五十二歳を以て終れり。

彼の作は目前に見る所を寫して、いまだ一部の趣向を構ふるに至らず。

されどその描く所は元祿時代の活世相なるを以て、彼の様に依つて胡蘆を畫き、徒らに陳套爛熟の美辭麗句を臚列する物語風の弊を蟬脱し、輕妙簡潔なる俳諧的修辭と、敏慧尖銳なる諧謔譏刺とを以て、新機軸を出し、平安朝以後萎靡沈滯せる我が小説壇に一生面を開けり。

本書收むる所、大下馬、武道傳來記、日本永代藏、世間胸算用、置土産の六部二十八卷、ほど解題を加ふること左の如し。

大下馬 題簽には西鶴諸國ばなしとあり、其名の如く諸國の奇談を集めたるものにて、百物語類の系統に屬す。此書は五冊物なるも傳本乏しくして完本を獲ず、その五の卷を缺けり。されど從來世にいでたる四卷物の翻刻本に比ぶれば、「紫女」、「命に替る鼻の先」、「驚くは三十七度」、「夢に京よ

り戻る、「力なしの大佛」鯉のちらし紋の六章を増加せり。朝倉氏の小説年表に此書の卷數を三卷とし、刊行を貞享二年とせるは、何に基けるかを知らず。

武道傳來記 敵打果合等、専ら武張りたる説話の短篇集にして、貞享四年の出版なり。此時代の武士道が名聞形式に拘泥せしは事實なるも、著者の筆は形骸を寫して、精神を傳へざるの憾なき能はず、要するに武家の觀察は此翁の長所にあらず。

日本永代藏 一名を新長者教といふ。之よりさき節儉力行の心得を説きたる長者教(寛永四年刊)と題する小冊子あるに對してかくは云へるなり。本書は一種の商人立志傳として、汎く世に行はれたりと見え、内容

の順序を變更し、漢字交り文を假名がきに改めたる二種の偽版あり。されば貞享五年の刊本を原本とし、偽版本をも參照して、頭註に一々其異同を掲げ示せり。則ち一本とあるは二種の偽版本を指すものと知るべし。

胸算用 定めなき世の定めとか、此翁の吟じけん大晦日の遣繰算段の、苦しくも亦可笑しき魂膽を、寫し出せる老熟圓滑の筆致、商人物中の傑作にして、鶴が最後の作たるに恥ぢず。

置土産 傾城買の行末はかうなるものと、知るも知らぬも落ちぶれ果てし昔大盡の身の上話、とりぐにをかしきが、間、文脈の混亂せし所見ゆるは、門人團水等の補綴せしにや、四卷第一章の末に、三の卷よりは迄

西鶴正筆也」とことわれり。歿後遺稿を刊行せしものにて、卷首に肖像、辭世、追悼の句を載す。馬琴の燕石襟志に西鶴彼岸櫻（元祿六年江戸板）といへるは、蓋し此置土産を求板改題せしものなるべし。

校訂の方針は原本の面目を保存するを旨とし、假名遣を一定し、灯提（提灯）石流（流石）眼色（顔色）等の甚しき宛字を改め、假名を漢字に替へし外、一切私意を加へず、明に傭書の誤脱と認むべきものまでも、頭註に注意を付し置くに止めたり。原本に傍訓送假名なくして二様に讀まるべきマチ、チャウ（町）オン、ゴ（御）ナリテ、ナツテ（成て）タツル、タテル（立る）の如き、すべて妄に假名を附加せず。

分限 ブンゲン 越度 チツド 律義 リツギ 女房 ニウバウ の類、所により

て傍訓の異なるも、皆原本のまゝなり。從來の翻刻多くは上方語を東京風に讀み誤りて、カヅクをカツグ、キルモノをキモノなど訓ぜり。本書に於ては是等粗漫の過失、一切これなきを期せり。

大正二年五月

校訂者 藤井紫影

西鶴文集卷上 目録

大下馬 近年諸國咄

序……………一

卷一

公事は破らずに勝つ……………	五
見せぬ所は女大工……………	八
大晦日は合はぬ算用……………	一〇
傘の御託宣……………	一四
不思議の足音……………	一六
雲中の腕押……………	二〇
狐四天王……………	二三

卷二

姿の飛乗物……………	二七
十二人の俄坊主……………	二八
水筋の拔道……………	三三
残るものとて金の鍋……………	三四
夢路の風車……………	三八
男地藏……………	四〇
神鳴の病中……………	四三

卷三

蚤の籠ぬけ……………	四七
面影の焼殘……………	五一
お霜月の作罷……………	五三
紫女……………	五六
行末の寶船……………	五八
八疊敷の蓮の葉……………	六二
因果の拔穴……………	六三

卷 四

形は晝の眞似	六九
忍び扇の長歌	七〇
命に替はる鼻の先	七三
驚くは三十七度	七六
夢に京より戻る	七七
力なしの大佛	七八
鯉のちらし紋	八一

武道傳來記 諸國敵討

序	八三
---	----

卷 一

心底をひく琵琶の海	八七
毒藥は箱入の命	九五

嗚嗒といふ俄正月	一一〇
内儀の利發は替つた姿	一一二

卷 二

思入吹く女尺八	一二三
見ぬ人貌に宵の無分別	一二八
身軀破る落書の團	一三三
命とらるる人魚の海	一三九

卷 三

人さし指が三百石	一四七
按摩とらする化物屋敷	一五三
大蛇も世にある人が見た例	一六〇
初茸狩は戀草の種	一六四

卷 四

太夫格子に立つ名の男	一七三
------------	-----

誰か捨子の仕合……………	一八一
無分別は見越の木登……………	一八五
踊の中の似せ姿……………	一九六

卷 五

枕に残る藥違ひ……………	二〇三
吟味は奥島の袴……………	二〇九
不斷心懸の早馬……………	二一五
火燧もありく四足の庭……………	二三三

卷 六

女の作れる男文字……………	二三二
神木の咎めは弓矢八幡……………	二三七
毒酒を請太刀の身……………	二四二
碓ひくべき埴生の琴……………	二五二

卷 七

我が命の早使……………	二六一
若衆盛は宮城野の萩……………	二六九
新田原藤太……………	二七三
愁の中へ樽肴……………	二八〇

卷 八

野机の煙くらべ……………	二八七
惜しや前髪箱根山嵐……………	二九五
播州の浦浪皆かへり討……………	二九九
行水で知るる人の身の程……………	三〇五

日本永代藏

卷 一

初午は乗つてくる仕合……………	三二三
二代目に破る扇の目……………	三七

浪風靜に神通丸……………	三二
昔は掛算今は當座銀……………	三六
世は欲の入札に仕合……………	三〇

卷 二

世界の借屋大將……………	三七
怪我の冬神鳴……………	四二
才覺を笠に著る大黒……………	四六
天狗は家名の風車……………	五二
舟人馬かた燈屋の庭……………	五五

卷 三

煎じやう常とばかり問藥……………	六一
國に移して風呂釜の大臣……………	六四
世はぬきどりの觀音の眼……………	六九
高野山借錢塚の施主……………	七四
紙子身袋の破れ時……………	七七

卷 四

祈るしるしの神の折敷……………	三五
心を疊み込む古筆屏風……………	三九
仕合せの種を蒔錢……………	三九
茶の十徳も一度に皆……………	三八
伊勢海老の高買……………	四〇

卷 五

廻り遠きは時計細工……………	四二
世渡りには淀鯉のはたらき……………	四六
大豆一粒の光り堂……………	四三
朝の鹽籠夕の油桶……………	四六
三匁五分曙のかね……………	四九

卷 六

銀のなる木は門口の柵……………	四七
-----------------	----

見立てて養子が利發……………	四四一
買置は世の心やすい時……………	四四六
身跡かたまる淀川のうるし……………	四四八
智恵をはかる八十八の升搔……………	四五二

胸 算 用 大晦日は一日千金

序……………	四五九
--------	-----

卷 一

間屋の寛濶女……………	四六三
長刀はむかしの鞘……………	四六八
伊勢海老は春の紅葉……………	四七二
鼠の文づかひ……………	四七九

卷 二

銀一匁の講中……………	四八五
-------------	-----

嘘も只は聞かぬ宿……………	四九一
尤も始末の異見……………	四九四
門柱も皆かりの世……………	四九八

卷 三

都の顔見世芝居……………	五〇七
年の内の餅花はながめ……………	五一三
小判は寢姿の夢……………	五一六
神さへ御目違ひ……………	五二〇

卷 四

闇の夜の悪口……………	五二九
奈良の庭竈……………	五三四
亭主の入り替り……………	五三七
長崎の柱餅……………	五四三

卷 五

つまりての夜市	五四九
才覺の軸すだれ	五五五
平太郎殿	五五九
長久の江戸店	五六六

西鶴置土産

序(團水)	五七〇
序	五七一

卷 一

大釜の拔殘し古金屋が寢覺	五七五
四十九日の堪忍是からは皆我物	五八一
儒もいひすこして契の豕餅	五八六

卷 二

愛宕嵐の袖さむし	五九五
----------	-----

人には棒振蟲同前に思はれ	六〇一
憂きは餅屋つらきは碓ふみ	六〇五

卷 三

思はせ姿今は土人形	六一五
子が親の勘當逆川を泳ぐ	六二〇
算用して見れば一年二百貫目つかひ	六二三

卷 四

江戸の小主水と京の唐土と	六三二
大晦日の伊勢参わらやの琴	六三六
戀風は米のあがり局にさがりあり	六三九

卷 五

女郎がよいといふ野郎がよいといふ	六四七
知れぬものは勤女の子の親目に見ぬ	
戀に皆になし	六五一
都もさびし朝腹の獻立	六五四

大 下 馬 (追補)

卷 五

灯挑に朝顔	六六三
戀の出見世	六六四
樂の鱈鮎の手	六六五
闇の手形	六六七
執心の息筋	六六九
身捨る油壺	六七〇
銀がおとして有	六七二

世間の廣き事、國々を見巡りて、はなしの種を求めぬ。熊野の奥には、湯
の中に鰭振る魚あり、筑前國には、一つをさし荷ひの大蕪あり、豊後の大
竹は手桶となり、若狹國に、二百餘歳の白比丘尼のすめり、近江國堅田に、
七尺五寸の大女房もあり、丹波に一丈二尺のから鮭の宮あり、松前に百
間續きの荒和布あり、阿波の鳴戸に龍女のかけ硯あり、加賀の白山に、閻
魔王の巾著もあり、信濃の寐覺の床に、浦島が火打箱あり、鎌倉に頼朝の
小遣帳あり、都の嵯峨に四十一まで大振袖の女あり。是れをおもふに、
人は妖物、世に無いものはなし。